３.三浦佐原一族の本拠と造寺活動　―満願寺出土中世瓦群との関連から―

渡邊　浩貴

はじめに―鎌倉御家人の造寺活動―

神奈川県横須賀市岩戸に所在する臨済宗建長寺派の満願寺は、寺伝で寿永三年（1184）に相模国三浦一族の庶子佐原義連が創建したと伝承される古刹である。鎌倉期に天台浄土系の氏寺として佐原氏に外護され、十四世紀前半頃に明岩正因より臨済禅へ改宗されている（『新編相模国風土記稿』『檀林光明寺志』）。その満願寺境内からは１万点以上の瓦群が出土しており、中世瓦も多数含まれている。これらは、一部がすでに報告書に記載されるものの［横須賀市教育委員会 1992］、満願寺出土中世瓦群のなかでの瓦編年の作成、および量的変遷に関する基礎的検討は行われていなかった。この度、県費に基づく神奈川県立歴史博物館総合研究の助成を受けて実施した調査の結果、満願寺中世瓦群について、主に十二世紀末期から十三世紀初頭までに相模地域へ移入されたと考えられている尾張国八事裏山窯産を含む尾張産の可能性の高い中世瓦（蓮華文軒丸瓦、唐草文軒平瓦）が出土していること、などが明らかになっている。

ところで、鎌倉御家人が自身の本拠に、寺院をはじめ様々な宗教施設を造営し地域支配を進めたことはよく知られている。文献史学では、主として寺院を構成する寺僧集団の性格や寺領経営などの組織・運営論、あるいは法会・儀礼の内容分析を通じた地域社会における寺院の役割などの機能論が検討対象であった。勿論、これらの事情の背景に文献史料の残存という制約があるものの、上述の研究はすべて御家人たちが造営した寺院のソフトウェア（コト）の側面を明らかにしたものである。

その一方で、中世寺院そのものは多くのモノ資料から構成される。寺院内の各種堂塔や付属施設などの建築物では、礎石のための石材や建物の基幹部材となる木材、金属類や屋根を葺くための瓦類、各堂塔内には仏像や経典・仏具・荘厳具・調度品、寺領内には石塔・五輪塔・宝篋印塔・板碑などの石造物や経塚・巨樹などが配される。これらは寺院のハードウェア（モノ）をなす。寺院のモノ資料は、これまで建築史学・考古学・美術史学の分野で研究が重ねられているものの、文献史学側から御家人の造寺活動の実態－伽藍配置や瓦葺礎石建物の有無など寺院そのものの性格－への言及はほとんどされていない。考古学の編年観にすべて依拠して寺院を評価することには慎重になるべきだが、隣接諸分野の見解を参照しつつ、鎌倉御家人の造寺活動の実態を把握する試みは決して無駄な作業ではなかろう。

佐原氏については、これまで基礎的研究が積み重ねられ、宝治合戦後の動向や鎌倉後期政治史における位置づけなどが明らかにされている［鈴木 2000・湯山 2011・横須賀市 2012・高橋 2016a ほか］。ただし、満願寺をはじめ本拠地周辺での動向や造寺・造仏活動の様相や、複数存在する佐原一族の各系統の活動基盤などについては、なお研究の余地を残していよう。そこで本稿は、前述の満願寺出土中世瓦群の観察で得られた考古学的所見を参照しつつも、文献資料や他の地域資料を用いて、満願寺を外護した三浦氏庶流佐原氏の鎌倉期における本拠地での動向を検討し、佐原一族の展開と造寺活動との相関関係を探りたい。同寺出土中世瓦群の特徴が、それを造営し外護した鎌倉御家人の政治的動向や本拠地での活動と、果たしてどこまでリンクし得るのかは未知数な部分が多いものの、佐原一族の造寺活動の実態、ひいては彼らが形作る本拠の性格とその展開まで踏み込んで検討を加えていく。

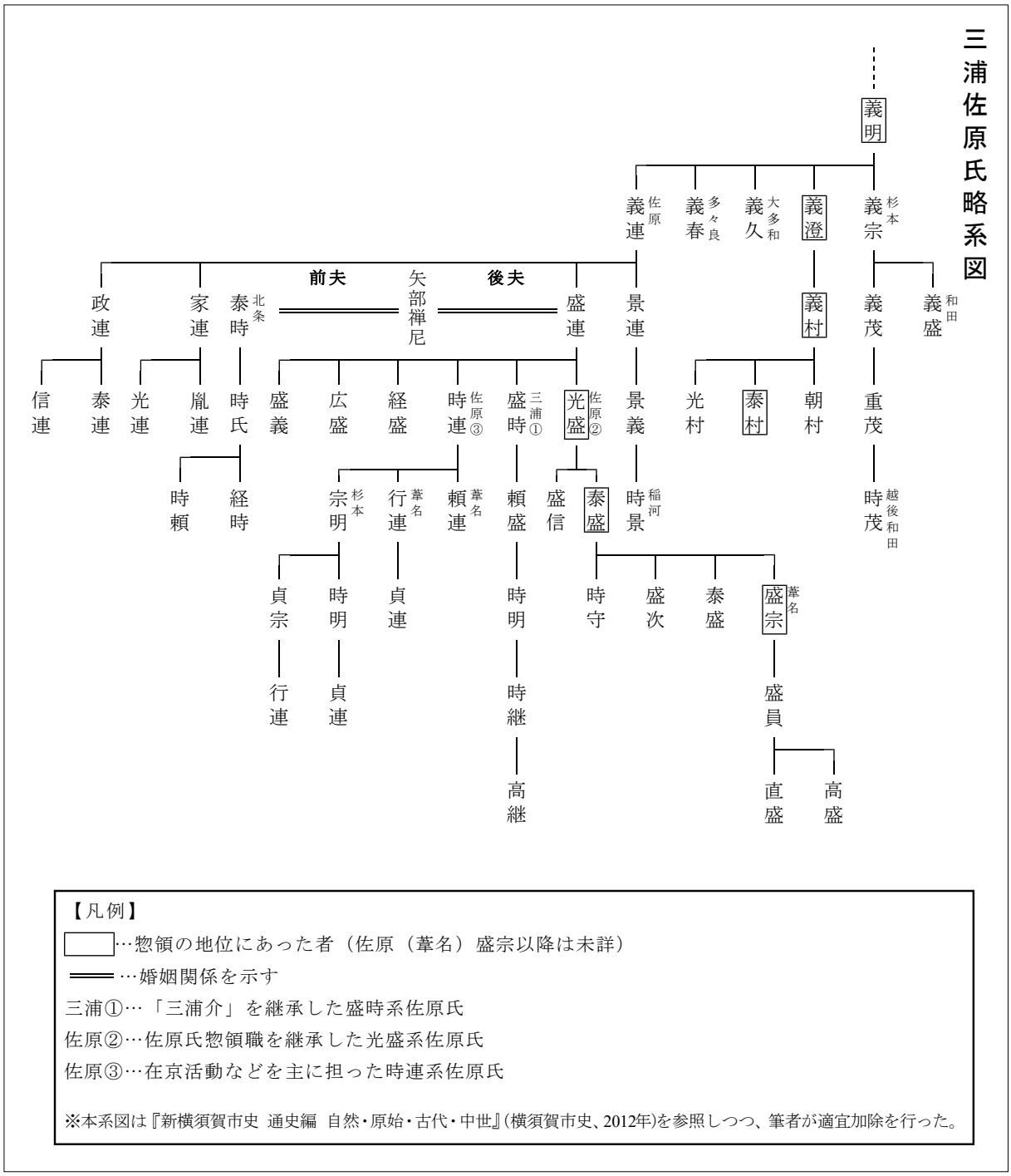
１．満願寺創建と佐原氏・北条氏

（１）満願寺の創建をめぐって

そもそも佐原氏の氏寺満願寺の創建年代は、近世地誌『三浦古尋録』（作者加藤山寿、文化九年（1812）刊）に採録される寛文五年（1665）「満願寺総縁記」に、「抑此寺之本願者、当国之住人三浦為通之苗

裔三浦介義明之末子佐原十郎義連之建立也、尋其由来、寿永三年〈甲辰〉春源頼朝卿為平家追討、被相催関東諸軍勢、于時義連随彼催促将赴于西国、（中略）然後於岩戸邑建立一宇之蘭若」「修此寺建立大伽藍、於是号満願寺」と記される。縁起によれば、源頼朝に従軍する佐原義連が西国へ赴くに際して一堂を寿永三年（1184）に建立し、帰郷の後に大伽藍を建立して満願寺と号したことになる。

すでに指摘されるように、合戦への参加を契機に鎌倉御家人の本拠地で仏堂が建立される事例は珍しくない［横須賀市 2012］。奥州合戦に参戦する北条時政が文治五年（1189）六月六日に伊豆国の本拠地に願成就院を建立したものと記録され（『吾妻鏡』、実際には文治三年に建立［秋山 2006 ほか］）、同年七月十八日にも頼朝が戦勝祈願のため伊豆国北条での造寺を立願している（『同』）。また帰陣後の事例も、例えば奥州合戦に参加した足利義兼は、本拠地に樺崎寺を建立している（「鑁阿寺樺崎縁起并仏



【凡例】

□…惣領の地位にあった者（佐原（葦名）盛宗以降は未詳）

═══…婚姻関係を示す

三浦①…「三浦介」を継承した盛時系佐原氏

佐原②…佐原氏惣領職を継承した光盛系佐原氏

佐原③…在京活動などを主に担った時連系佐原氏

※本系図は『新横須賀市史 通史編 自然・原始・古代・中世』(横須賀市史、2012年)を参照しつつ、筆者が適宜加除を行った。

事次第」)。これらを勘案するに、先の満願寺の近世由緒を全くの偽作として排除することはできず、佐原義連による何らかの造寺活動が、頼朝への従軍という出来事に引き掛けて後世に言説化された可能性が高かろう。義連が、少なくとも寿永元年（1182）には佐原を名字と称したため（『吾妻鏡』同年八月十一日条)、本貫地である同地にむしろ宗教施設を何も置かなかったとは想定しづらく、小堂規模の施設の存在は認めてもよかろう。

しかし、満願寺に遺る観音菩薩立像・地蔵菩薩立像の二軀の制作年代は十三世紀初頭の慶派仏師によるものとされており［横須賀市 2009］、縁起に記載される創建年代と齟齬が生じる。これに対して、佐原義連の没年が元久元年（1204）四月から承元元年（1207）六月以前の時期と推定されるため、満願寺での造寺・造仏時期の開始時期をこれにあてる見解も示されている［横須賀市 2012］。

そうしたなか、以下の史料は佐原氏による造寺活動の一端を示すものである。

【史料１】元仁元年（1224）十月「泉涌寺不可棄法師伝」(『新横須賀市史Ⅰ』748 号)[1]

同冬十月、依肥州刺史平家連(佐原)之請、下向関東、経過十六駅亭、衒売之女忘脂粉而受戒、漁猟之男抛網竿而聞法、遂到家連三浦館、供養梵字、投歩鎌倉、二品禅定比丘尼(北条政子)〈諱如実、〉并武州刺史平泰時(北条)朝臣受菩薩戒、総逗留鎌倉一七日間、或授戒法、或讃仏経、道俗顒々、昼夜無間、

【史料１】は京都泉涌寺開山で入宋経験のある俊芿が、佐原家連の招請で「家連三浦館」に招かれ、「供養梵宇」を催したという内容を記す。これまで当該記事の仏堂供養を満願寺での大規模供養ないしは満願寺の創建時期とする指摘もあるが［横須賀市 2012］、そもそも当時の佐原義連の子息には景連・盛連・家連らが複数おり、なかでも長子景連は、建久六年（1195）の源頼朝による東大寺供養に義連の子息の中で唯一随兵として参加し（『吾妻鏡』同年三月十日条)、また元久元年（1204）には、紀伊国熊野山七重塔造営の功により、父義連がかつて任官された「左衛門尉」にも任じられている（『三長記』同年四月十二日条)。官職でみるならば、佐原氏のなかで当初は景連が嫡流と目されていた可能性が高い。そうなれば、家連主催による仏堂供養を、直截に氏寺満願寺の供養（さらには落慶供養）と結論づけるには躊躇され、今一度その背景を検討する必要がある。

（２）北条時房と佐原家連

俊芿が三浦館に招請される以前、景連はしばしば幕府垸飯役や社寺への将軍参詣の随兵などを務め、またその子息景義も同様に幕府儀礼に従事しており、鎌倉周辺での活動が目立つ。一方の家連は紀伊国南部荘地頭職を有し、当該地での活動がみえるが、承久の乱後になると、貞応二年（1223）に紀伊国守護となっており（『新横Ⅰ』714 号)、嘉禎年間（1235~1238）に肥前守に補任され国守を務めている。さらに家連は執権北条一族との関わりが深く、安貞二年（1228）五月十六日に北条時房の子息時直に嫁した娘が男子を出産しており（『吾妻鏡』)、すくなくも同年以前から北条時房との関係が築かれていた[2]。翌年には時房主催の垸飯で家連が行縢・沓役を務め（しかも「左衛門尉」に任官していた)、以後は毎年のように参加がみられることから、急速な北条氏への接近があったとみられる。その結果であろう、寛元三年（1243）七月十七日の将軍藤原頼経の臨時出御供奉人を定めた際に、佐原氏の序列の中で家連が最上位で記載されている（『同』)。

佐原氏の北条氏への接近は、とくに延応元年（1239）の時房主催の垸飯で顕著で、家連をはじめ、子息の胤家・光連や家連兄弟の政連や一族の助連らが参加している（『同』正月一日条)。ほかに家連兄弟の盛連のもとには、もともと北条泰時に嫁していた三浦義村娘が再嫁（後の矢部禅尼）しており、嘉禄二年（1226）には盛連の継子北条時氏（北条泰時と三浦義村娘との子）に随行して六波羅探題に出入りし「在京武士遠江国司」として記録されている（『明月記』同年正月二十四日条)。盛連は遠江守という国守を務めているだけでなく、西園寺家庶流とも姻戚関係を有しており、執権北条一族や京都など独自のネットワークを構築していたことが明らかになっている［高橋 2016a］。

さて、以上の佐原一族の動向を踏まえるに、俊芿を招請した元仁元年（1224）では、すでに佐原一族のなかで執権北条一族に接近した家連・盛連が有力勢力として位置付いていたと思われる。とりわけ家連と俊芿とを繋ぐ人的関係においては、嘉禄元年（1225）まで六波羅南方探題を務めた北条時房との姻戚関係が重要であろう。時房は執権北条氏一族のなかで在京活動を担い、彼の拠点となった六波羅探題の地は、俊芿が開山となった泉涌寺と極めて近い地理環境にあった。加えて、時房は建保六年（1218）に、実朝の後継者問題について会見を行うため上洛した政子に同行し、さらに承久元年（1219）の三寅（九条道家の子息、後の頼経）下向の交渉にも加わっていた。当該期の時房は執権北条氏を主導する義時・政子を支えつつ在京活動を主に担い、承久の乱以前の幕府内では、泰時を凌ぐ地位にあったという［岩田 2016］。この三寅が誕生する際、道家室の倫子の出産時の戒師を俊芿が務めているなど、入宋僧俊芿と九条家との関係は彼が帰朝した早い時期から築かれていた［西谷 2018］。家連が俊芿との間に接点を持ち得た背景に、九条家との繋がりのある北条時房を介した人的関係があったと考えられる。さらに、俊芿の三浦・鎌倉下向の背後には、執権北条氏の意向も垣間見える。俊芿は家連の三浦館で仏堂供養を行った後、その足で鎌倉へ赴き北条政子・泰時の戒師を務め同地で半月ほどの滞在をしている。【史料１】の時期、在京活動を担った時房は、幕府首脳陣の一人として執権北条義時の死後も鎌倉に戻らず探題として在京を続け［上横手 1958・渡邊 2015］、幕府の歳首垸飯儀礼では嘉禄元年（1225）・同二年と正月一日を務めることから幕府内序列ではトップに位置付いていた［渡邊 2015］。そうなれば、この度の俊芿の下向は、時房との人的関係を通じて、すでに三浦・鎌倉の地での彼の活動が予定されていたからこそ、上記の行程が組まれたのだろう。俊芿の鎌倉下向は、三浦家連を媒介としつつ北条時房・政子・泰時ら執権北条一族の意向によってなされた事業だったと想像される。

いずれにせよ、佐原家連による俊芿招請と仏堂供養は、北条時房への接近がもたらした文化事業と考えられ、当時の家連の人的関係と一族内での地位を勘案するに、氏寺満願寺の供養を主催する人物としてふさわしい存在といえよう。

２．佐原氏本拠と満願寺の成立過程

（１）鎌倉期満願寺の成立と伽藍形成

満願寺遺跡からは、建物遺構として中心建造物に相当する箇所に、同寺参道脇に径 80 ㎝前後の安山岩製大型礎石６個が残されており、これらを設置するのに相応な規模・形状の建物を備えた伽藍配置があったと考えられ、ある段階で建替えや既存建造物の規模拡張を含む再建がなされたという［横須賀市教育委員会 1992］。これら伽藍配置の形成は、日想観の行儀を記す『観無量寿経』など多くの浄土教経典を宋から将来した俊芿との関わりが想定されよう。また横須賀市大矢部の清雲寺に所蔵される右膝を立てて坐す形姿の観音菩薩坐像は、もともと三浦為通を開基と伝える大矢部の円通寺（現在は廃寺）にあったもので、明治期に清雲寺に伝来した。この観音菩薩坐像の制作年代は、寛元二年（1244）頃に南宋から請来された泉涌寺の観音菩薩坐像や嘉禎三年（1237）に建仁寺僧が南宋明州の工人に制作させたと銘記される菩薩坐像（兵庫県法恩寺）と像容・技法が近似しているため、十三世紀中頃に南宋で造像されたものと考えられている［横須賀市 2009］。

その移入契機については、三浦家連と泉涌寺僧俊芿との関係が指摘され［横須賀市 2009・2012］、日宋貿易と密接な肥前国神崎荘等を含む彼の肥前守への就任はその想定を補強しようか。また三浦氏惣領の泰村（義村の嫡子）は日宋貿易と関わる筑前国宗像社や肥前国神崎荘の地頭職を持っており、かかる関係から南宋で造像された旧円通寺所蔵の観音菩薩坐像が移されたことも指摘される［横須賀市 2009・横須賀市 2012］。三浦義村は寛喜元年（1229）、すでに天台浄土系の僧浄蓮房源延を三浦に招き盛大な迎講を実施しているため（『吾妻鏡』同年二月二十日・二十一日条）、三浦惣領家独自のネット

ワークに基づく請来の可能性もあろう。いずれの理由かは判然としないものの、当該期の三浦氏本拠周辺では惣領家や佐原氏ともに浄土系仏教儀礼の摂取や催行が行われていたことは確かであり、先の仏像はこうした三浦一族の動向を反映した遺物と考えられる。

となれば、俊芿を招請して実施された満願寺供養と、同寺に伝来する十三世紀初頭の慶派仏師制作による観音菩薩立像・地蔵菩薩立像の二軀が造像された時期とは、一定の段階差を認める必要があろう。後者が果たして先行研究が指摘する佐原義連供養を契機としたものかは確言できないが、少なくとも満願寺での当初の尊像構成が正治二年（1200）に北条時政が故頼朝一周忌に願成就院北隣に仏堂を建立した際の尊像構成とほぼ一致しているため（『吾妻鏡』同年正月十三日条）、同時期頃の制作とみられている［横須賀市史 2009］。当該期満願寺での造像を主導した人物に、佐原義連あるいは長子景連を想定できる。また佐原義連が本拠とする当該地に、すでに冒頭で取り上げた「満願寺総縁記」に記されるような仏堂が当初からまったくなかったとも考えがたい（義連の動向については次章で検討する）。

（2）佐原氏の本拠形成

佐原義連の本拠は相模国三浦郡矢部郷のうち、岩戸川が流れる谷戸内に形成されていた[(3)]。当初の居館については考古学的成果が乏しく、岩戸川西側の谷戸舌状地上にあり近世佐原村・岩戸村等を扼する立地にある泉遺跡周辺、満願寺近辺などの候補地が想定されている［中三川 2015］。例えば三浦惣領家の本拠について、近世大矢部村付近が居館候補地とされ［石井 1987］、満昌寺・近殿神社・薬王寺周辺を三浦惣領家の居住空間に、南隣する清雲寺・円通寺を極楽往生・現世利益を達成する宗教施設に、谷戸奥の坂ノ台経塚や金峯蔵王権現社・別当大善寺・不動堂のある衣笠城跡周辺を聖地と把握する見解も出されている［齋藤 2006］。とくに衣笠城跡に近在し大善寺に伝世する伝毘沙門天像は、岩手県平泉町の中尊寺金色堂中央壇にある増長天像に像容・技法ともに酷似しており、平泉文化を色濃く受けた鎌倉初期の制作と指摘される［横須賀市 2009］。三浦氏は奥州合戦に参加しており、平泉での浄土文化に接触した結果、この像が一族の聖地とされる地に祀られた可能性がある。三浦氏の奥州合戦参戦を契機に取り入れられた文化遺産といえよう。

そうなれば、佐原義連が西国への平家追討を契機に建立した満願寺の事情とも共通性が見出せる。三浦一族では、治承・寿永内乱での戦争を契機に自身の本拠地内で聖地とされる場所の整備ないしは仏堂の建立が進んだのではないだろうか。佐原義連は『吾妻鏡』等でしばしば「三浦十郎義連」と三浦姓で記載されることが多いものの、少なくとも寿永元年（1182）の御台所御産による諸社奉幣使派遣で三浦十二天社への奉幣使を務めた義連を「佐原十郎」と記す（『吾妻鏡』同年八月十一日条）。義連の時期から佐原の地を本拠地としていたことは確かであろう。そして、当初の佐原氏の本拠は谷戸入り口付近にある泉遺跡周辺にあって、谷奥の開発が進展するにつれ、満願寺および周辺の社寺整備が進んだのではないだろうか。泉遺跡より十世紀末から十一世紀前半の時期にあたる馬具鉄製品の締具・兵庫鎖片・鐙片が出土し、馬の飼育関係に関わる遺跡の可能性と見られ、また泉遺跡東側には小字「大庭田」という満願寺の飛び地があることも旧寺領としての関係性が窺える［中三川 2015］。泉遺跡周辺は平安末期段階で地域の拠点的性格を見出しうるのである。

これらを踏まえるに、本稿では当初の佐原氏の居館空間は岩戸川を流れる谷戸の入り口付近（泉遺跡周辺）にあり、一族の宗教施設として谷戸奥に持仏堂などが設けられていたと想定したい。その上で、満願寺の創建および以後の伽藍形成は、鎌倉期にかかる義連期頃に創建された小堂をベースとしつつ、谷戸内の開発の進展（本拠地支配の深化）とともに、義連あるいは長子景連による慶派仏師の造仏活動や、執権北条氏との関係を強化した家連の俊芿招請による寺容整備および伽藍形成へと段階的に行われたのだろう。とくに満願寺遺跡で見られる堂舎の建替えや規模拡張の様相は、元仁元年（1224）に招請された俊芿の影響と考えられる。推測に推測を重ねたが、本稿では満願寺の成立過程を以上のように

段階的に把握したい。

３．初期鎌倉幕府の造寺活動と佐原一族

（１）慶派仏師との邂逅

前章の文献史料を踏まえた考察に対し、満願寺出土中世瓦群で見出された性格はどのようにリンクし得るのだろうか。

冒頭で述べたように、上述の佐原氏と氏寺満願寺との関係については、本調査で提示した十二世紀末期から十三世紀初頭の尾張産瓦が注目され、同寺の創建期に該当する瓦の可能性がある（本報告書では満願寺Ⅰ期瓦と仮称）。だが、満願寺の創建年代と伝承される寿永三年（1184）の時期に同寺が瓦葺であったとする確証はなく（そもそも伝承通りの創建年代だったことすら確言できない）、これらの瓦群を即座に創建期のものと断じることには慎重でありたい。ただし、満願寺が寺容を整備し始めたのが、慶派仏師による満願寺諸尊の造像事業が端緒と考えられ、かつ満願寺の尊像構成が正治二年（1200）に北条時政が故頼朝一周忌で仏堂を建立した際のものと類似することから、頼朝が没する前後の 1200 年周辺からあまり隔たない時期であったと想像される。前述したように、当該期に満願寺での造仏・造寺事業を主導し得る人物は佐原義連あるいは長子の景連であろう。ではなぜ彼らは、慶派仏師に自身の本拠地における造仏事業を依頼することができたのか。

義連・景連親子が慶派仏師と関わる契機に、頼朝による建久元年（1190）十一月の後白河院との会談、そして建久六年三月の東大寺供養の二度にわたる上洛に父子共々供奉したことが考えられる。とくに多くの鎌倉御家人が上洛し参列した東大寺供養では、同時に京・南都での本場の仏教文化に触れる機会となった。例えば、供奉を務めていた武蔵国御家人畠山重忠は、在京期間中に栂尾山の明恵に謁談して浄土宗法門について談議し（『吾妻鏡』建久六年四月五日条）、同国御家人津戸為守も東大寺供養で上洛し法然と出会い浄土宗に帰依しているという（『法然上人伝記』「津戸消息事」）。そうしたなか、同国御家人小代行平は奈良仏師快慶による建仁三年（1203）制作の醍醐寺不動明王像の結縁者末尾に「有道行平」とみえ、奈良仏師と児玉党出身の一御家人と関係があったことが窺える。行平も東大寺供養に参列しており、この経験が慶派仏師と出会う契機となったと指摘されている［山野 2019］。

一回目の頼朝による上洛は、途上での様々な政治的パフォーマンスを含みながら、久方ぶりの京都文化を頼朝が直接肌で感じ、多くの文化要素を持ち帰る機会ともなった。頼朝は、鎌倉帰還後に急速な音楽整備や京都楽人の招請依頼を行い、さらに当時後白河院のもとで活躍する奈良仏師康慶との知己を得て、後に永福寺造営期間中の建久二年に大江広元を通じて後白河へ康慶の鎌倉下向を打診し、院近臣日野範綱から「康慶事、委令申候了、下向□（無）異議候歟」という返答を得ている（（建久二年）二月十日「藤原範綱書状」『和歌真字序集（扶桑古文集）』）［渡邊 2022abc］。頼朝周辺の造像では康慶を起用し、その他有力御家人北条氏・和田氏・足利氏の造像では弟子運慶が起用されていることから、そこには将軍家と有力御家人との間で差が設けられていることも了解される［渡邊 2022b］。二回目の上洛では広く康慶・運慶・快慶らが携わって完成させた東大寺南大門の諸像など、慶派仏師の活動を有力御家人足利氏をはじめその他中小御家人たちが目にする機会となった。それは仏師だけでなく、多くの宗教者と接点を持ち結縁する機会ともなったのである。そうした点を踏まえるに、佐原義連・景連父子が二回目の東大寺供養に供奉して慶派仏師の活動を目の当たりにし、京都社会で交流を持ち、その後本拠地の氏寺満願寺での造像依頼に結実したことも十分推測される。

慶派仏師による満願寺諸像は、かかる佐原義連・景連の東大寺供養参列の結果もたらされた文化受容の遺物と理解したい。

（2）源頼朝と佐原義連

佐原義連の本拠にて、慶派仏師による造像がなされた要因には、佐原一族の経済力のみならず慶派仏師を多く起用した源頼朝の影響が考えられよう。実際に、頼朝が鎌倉で成し遂げた様々な文化事業は、御家人たちに大きな影響を与えていった。例えば永福寺は頼朝自身によって主導され建立された著名な大寺院であり、多くの主要御家人が動員されて建造作業が進められ、建久三年（1192）に落慶供養が営まれる。すでに先行研究で指摘されるように、永福寺Ⅰ期瓦と同笵・同文関係にある軒瓦は複数の鎌倉御家人本拠地から見つかっており、その理由に自己の支配領域での頼朝権威の利用目的であったり、頼朝と所縁のある御家人が彼に追従し結縁しようとする意識があった、という指摘がされている［石川2008・小林2022］。佐原氏と源頼朝との関係をみるに、次の史料は興味深い。

【史料２】『吾妻鏡』養和元年（1181）四月七日条

七日壬子、御家人等中、撰殊達弓箭之者所無御隔心之輩、毎夜可候于御寝所之近辺之由定云々、江間四郎（北条義時）・下河辺庄司行平・結城七郎朝光・和田次郎義茂・梶原源太景季・宇佐美平次実政・榛谷四郎朝・葛西三郎清重・三浦十郎義連・千葉太郎胤正・八田太郎知重、

以上は、養和元年（1181）に「毎夜可候于御寝所之近辺之由被定」と頼朝の寝所警固を担当するために選定された、北条義時・下河辺行平・結城朝光・和田義茂・梶原景季・宇佐美実政・榛谷重朝・葛西清重・三浦義連・千葉胤正・八田知重の十一名を記した記事である。いずれも頼朝挙兵以来の三浦義明や北条時政・八田知家の子息、つまり二世世代の御家人で構成され、実際にも頼朝寝所を中心に身辺警護を担い（文治五年（1189）に頼朝が彗星を見るため寝所を出た際、佐原義連・結城朝光・梶原景季・八田知重が警固している）、「皆近臣也」と記録された（『吾妻鏡』同年二月二十八日条）。前稿でも指摘したが［渡邊2022a］、上記のメンバーのうち、永福寺式軒瓦が出土している関係者を探すと、北条義時（北条時政の子息、願成就院遺跡から出土）、八田（小田）知重（八田知家の子息、三村山極楽寺遺跡・小田城跡）がおり、また多くの検討課題を残すが、黒駒地内「駒ノ墓」（茨城県下妻市）からも永福寺Ⅰ期瓦と同笵関係の軒平瓦が報告されている。同所には在来領主の下妻広幹が誅された後、建久三年（1192）に小山朝政（妻は頼朝の乳母寒河尼）が下妻荘の地頭職を得て進出している。結城朝光はこの朝政の弟にあたる[(4)]。

上述の昵近衆とも呼べる頼朝の近臣集団は、有力な御家人のなかより一族の惣領が健在でかつ次世代を担うべき人材たちが選出されており［菱沼2011］、血縁や乳母の関係を通じて頼朝個人と密接な関わりがある。頼朝近臣集団に、彼の肝いりで建立した永福寺と同文・同笵の瓦を使用したメンバーが複数いたことは、永福寺Ⅰ期瓦の受容を考える際に重要な点になると思われる。

如上の永福寺式瓦の事例を踏まえるに、頼朝と個人的に関係の深い御家人への文化的影響力は非常に大きかったことが窺えよう。佐原義連の本拠において、1200年頃に慶派仏師の造像が行われたことも、やはり頼朝周辺での造像事業が彼の近臣である義連に影響を与えたことは容易に想定できる。他に、文治五年（1189）には運慶による和田義盛らが願主となった浄楽寺での造像がされており、義盛弟の義茂も先の頼朝近臣に選出されている。義連の慶派仏師起用による造像の結果、当初の小堂であった氏寺も、次第に頼朝の文化的影響を受けつつ寺格を整えていったのであろう。

ただし、満願寺の形成過程を文献史料で見た場合、やはり元仁元年（1224）に招請された俊芿の来訪と仏堂建立は重要な起点となったに違いない。とくに満願寺遺跡で見られる堂舎の建替えや規模拡張の様相は俊芿招請の時期とリンクする可能性が高く、寺容整備および伽藍形成へと進んだと思われる。その際に瓦葺礎石建物の存在が想定され、あるいは満願寺出土中世瓦群のなかで、尾張産瓦よりも時期が下る年代とされる鎌倉前期頃の瓦群（本報告書では満願寺Ⅱ期瓦と仮称）はこれに相当するのかもしれない。

４．宝治合戦後の佐原一族と北遷

（１）宝治合戦後の佐原一族

鎌倉後期以降の三浦一族に関する研究は決して多くはない。それは、かつて公武に跨がる権力および人的関係を構築し、高度な文化レベルを誇った義村やその子息泰村・光村に比して、後の三浦一族に目立った活動が史料上あまり認められないことに起因しよう。しかし、文献史料と満願寺出土中世瓦の両方を検討すると、興味深い動向が看取される。まずは、先行研究を踏まえつつ［鈴木 2000・湯山 2011・横須賀市 2012・高橋 2016a ほか］、佐原一族の動向に私見を加えながら詳細に追うこととする。宝治元年（1247）六月の宝治合戦における佐原一族の去就をみるに、惣領家の三浦泰村・光村に与同して自害討死したなかに景連の系統では孫の稲河時景が、家連の系統では子息胤家・光連が、政連の系統では政連自身と子息泰連・信連などが見え、多くの一族が見出せる（『吾妻鏡』同年六月二十二日条）。義連子息の系統の大半が滅亡したこととなり、これまで俊苅招請段階での満願寺の主たる外護者を家連としてきたが、宝治合戦を契機に家連系統の一族の関与は断絶したと見られる。また本拠地についても、同年六月二十日「藤原頼嗣寄進状」（『新横Ⅰ』1230 号）では将軍藤原頼嗣が「相模国谷部郷」を鶴岡八幡宮に寄進しており、佐原一族の本拠地も含む矢部郷が宝治合戦後に没収されていた。

その一方で、盛連の子息六人（経連・光盛・盛時・時連・広盛・盛義）は北条時頼亭にいち早く参向し北条氏方へ従い（『吾妻鏡』同年六月二日条）、なかでも矢部禅尼（執権北条時頼の祖母にあたる）を母に持つという光盛・盛時・時連の系統は三浦一族の新たな嫡流として成長していく[5]。先学では、盛時・光連・時連をそれぞれ①「三浦介」の地位を継承した系統、②惣領として佐原氏を統括する系統、③横須賀流であり在京活動が顕著にみられる系統、の三系統に整理する。以下、佐原一族のなかで大きな役割を果たしたこの三系統の一族のうち、まずは①盛時系佐原氏と③時連系佐原氏の動向やその活動基盤の変遷を見ていく。

［盛時系佐原氏］

宝治合戦後、三浦一族は盛時を筆頭として幕府儀礼に復活し、宝治元年十一月十五日の鶴岡八幡宮放生会では「三浦五郎左衛門尉」と三浦を名乗って先陣随兵を勤める（『吾妻鏡』）。この時の先陣随兵の名簿で、盛時は波多野義重よりも下位に記されたため、「当家代々未含超越遺恨」と不服を申し立てている。もともと盛連系統での名乗りは、祖義連の官職遠江守が重視され、三浦を名乗ることはなかった。しかし、宝治合戦後から盛時は三浦を称しはじめ、かつ三浦一族としての当家意識も芽生えていた［高橋 2016a］。同年十二月二十九日の京都大番役結番には三浦惣領家の地位である「三浦介」を名乗り（『吾妻鏡』）、以後、盛時の系統が頼盛・時明と代々「三浦介」を継承する。

かつての三浦一族の権益については、以下の様な一族内での分担が見られる。

【史料３】建長元年（1249）八月十日「関東御教書」（『新横Ⅰ』1263 号）

御公事間事、於遠江前司盛連（佐原）跡者、可為次郎左衛門尉光盛（佐原）支配之由、被定下了、至兄弟等新給相模国所々者、為大介沙汰随分限令支配、自今以後相具盛連跡、可被勤仕之状、依仰執達如件、

建長元年八月十日　　相模守（北条時頼）（花押）
　　陸奥守（北条重時）（花押）

三浦介（盛時）殿

関東御公事の負担について、佐原氏惣領である「遠江前司盛連跡」は光盛の差配とし、「兄弟等新給相模国所々」は三浦介の地位にある盛時が国衙支配権に基づき分配することが幕府より指示される。盛連以来の惣領職はその嫡子光盛に、かつての惣領家泰村以来の三浦介の地位は盛時へ継承され、なお、「自今以後相具盛連跡」とあるように、一族全体の公事負担の総括者は「三浦介」である盛時と定められる。三浦介の地位を継承した盛時の権益のなかに、国衙に関するものも見られる。建長四年（1252）四月

一日の宗尊親王の鎌倉下向に際し盛時が大磯宿の儲所を盛時が行っており（「宗尊親王鎌倉下向記」『新横補遺』2905 号）、淘綾郡大磯は国衙領である。また文永元年（1264）十一月二十一日「関東御教書写」（『新横Ⅰ』1369 号）では盛時の子息頼盛が石清水八幡宮領「相模国古国府預所」となっている。古国府とは淘綾郡に国衙が移動する前の大住郡旧所在地を指すと思われる。以上は三浦介に関わる国衙関係の権益であり、これを盛時とその一族は継承したのだろう（あるいは【史料３】の「新給相模所々」として新たに獲得したものか）。

盛時の主たる拠点は都市鎌倉と考えられる。建長二年（1250）に北条時頼は鎌倉の「三浦介盛時家」を訪問し（『吾妻鏡』同年六月十九日条）、建治元年（1275）の六条八幡宮造営注文の費用負担では「鎌倉中」分として七十貫文が「佐原遠江前司跡」に賦課される（「六条八幡宮造営注文」『田中穣氏旧蔵典籍古文書』）。これは関東御公事分として御家人に課されたものであるため、【史料３】で「自今以後相具盛連跡」として一族全体の公事負担の統括を三浦介である盛時が務めたことを踏まえるに、この対象は在鎌倉する盛時系統が担ったものである。

以後の盛時系統は、幕府儀礼では諸大夫クラスの有力御家人として参列し、鎌倉末期には笠置城攻めの幕府軍に「三浦介入道（時継）」が加わっている（『太平記』）。その後、足利方へ転身し、三浦時明は鎌倉将軍府の関東廂番となるが（『建武記』）、建武二年（1335）の中先代の乱で三浦時継・時明（盛時系統の庶流）が北条与党となったため、それぞれ斬首・討死している。以後の相模国三浦一族の三浦介の地位を継承したのは高継で、同年九月二十七日「足利尊氏下文」で相模国大介職・三浦内三崎・松和・金田・菊名・網代・諸石・大礒郷などの所領所職を与えている（『新横Ⅱ』1551 号）。その後、高明系統が相模国守護職を継承していく。

［時連系佐原氏］

時連の系統に属す佐原氏は、在京活動が活発に見える一族である。時連や子息頼連は頻繁に東使を務めて上洛しており幕府上級御家人層であった。また、建長六年（1254）七月二日には検非違使となっている（「経俊卿記」（『新横補遺』2910 号）。検非違使は宝治合戦以前まで三浦光村が補任されており、時連系佐原氏が三浦一族のなかの在京勢力としての側面を継承したのであろう。頼連が霜月騒動で安達泰盛方に与同して自害した後も、時連子息の宗明が弘安七年（1284）に検非違使となり（『検非違使補任』）、同九年の後宇多天皇の春日行幸に供奉して従五位上に叙され（『勘仲記』同年四月一日条）、また子息の時明は西園寺家とも繋がりが深い（『公衡公記』正和三年（1314）十月六日・七日・八日条）

その後、宗明の一族は北条得宗被官としての活動が認められる。子息時明は、徳治二年（1307）七月二十六日「小笠原礼書」（『新横補遺』2930 号）にて成就御所での北条高時六歳の矢開で、餅の食手一番を勤める。また元亨三年（1323）十月二十五日「北条貞時十三年忌供養記」（『新横Ⅰ』1463 号）の参加した北条氏一門や得宗被官長崎氏や諏訪氏のなかに混じって「三浦安芸守（時明）」がおり、有力な得宗被官であった[(6)]。

矢部郷周辺では唯一の事例で、元亨三年（1323）正月「夢窓国師語録」（『新横Ⅰ』1465 号）に「相州三浦の横須賀といふ所に、いり海にのそミて泊船庵とて住玉ひける頃」「又三浦の庵を捨て、総州へおはしましける時、其庵の檀那三浦安芸前司貞連もとへつかはされける」との記事があり、時明の子息と思しき貞連が、古久里浜湾内の横須賀入海沿岸にある泊船庵を構えて夢窓疎石を庇護し、海上交通と関わっていた様子が知られる。彼らの本拠地については未詳だが、鎌倉中後期には在京・在鎌倉しつつ、少なくとも鎌倉末期段階までには古久里浜湾沿岸に拠点を有していた。

佐原一族のなかでもとりわけ時連系佐原氏は北条一族との関係が密接であり、南北朝内乱初期の正慶二年（1333）五月二十日「熊谷直経代同直久軍忠状」（『新横Ⅰ』1499 号）では「三浦安芸前司（貞連カ）」が丹後国熊野郡木津郷にて幕府方として参戦している。だが、その後は足利尊氏方に付き、鎌倉将軍府

の関東廂番に「若狭判官時明」が見え（「建武記」『新横Ⅱ』1523号）、また貞連は尊氏の侍所頭人として活動し（『太平記』）、新田義貞軍との戦闘で建武三年（1336）に戦死する（『梅松論』）。以後の時連系佐原氏は宗明から生じた貞宗・行連の系統が尊氏方として生き延び、室町期も存続していく。

（2）光盛系佐原氏の本拠と満願寺出土中世瓦群

【史料3】で見た通り、佐原一族惣領の地位は②光盛系佐原氏が継承した。関東御公事の負担では三浦介の地位を継承した盛時がその統括の位置にあったが、幕府儀礼での序列を見るに、建長二年（1250）の将軍藤原頼嗣による由比浦逍遙では、佐原光盛は三浦介より上位の序列で加わり（『吾妻鏡』同年八月十八日条）、六位の衛府尉官職を持つ侍層クラスのなかでも筆頭格になる。さらに同六年の鶴岡八幡宮放生会の随兵でも（『吾妻鏡』同年八月十五日条）、遠江守の国守に任じられた光盛は、五位の京官・国守の官職持つ諸大夫層クラスに位置づけられている［高橋2016a］。宝治合戦後の佐原一族の地位は、光盛の序列を見るに上昇したと言え、また幕府儀礼における三浦一族全体での序列は光盛系佐原氏が上位として把握されていた。

その本拠地については、すでに紹介したように、宝治元年（1247）に矢部郷が没収され鶴岡八幡宮に寄進されている（「藤原頼嗣寄進状」（『新横Ⅰ』1230号））。だが、【史料3】で佐原氏惣領である「遠江前司盛連跡」は光盛の差配となっているため、矢部郷内のうちの佐原義連が持っていた権益は返付されていた。さらに光盛系佐原氏については、旧三浦惣領家本拠での活動も認められる。

【史料4】文永八年（1271）五月十四日〔板碑銘〕（円通寺旧蔵『新横Ⅰ』1372号）

（阿弥陀種子）文永八年五月十四日左衛門尉平（佐原）盛信　右志者、先考
聖霊当十三
年遠忌、為成
仏得道、造立
供養如件、敬白、

【史料4】は円通寺旧蔵（現在清雲寺境内）にある板碑銘で、光盛の子息盛信が父の十三年遠忌のために板碑を造立した趣旨が記される。そうなれば、先の鎌倉幕府による鶴岡八幡宮への寄進は、領家が鶴岡八幡宮となったのであり、下地については三浦惣領家に代わって佐原一族（とくに光盛系佐原氏）が有した可能性が高い。史料を欠くため矢部郷内の三浦惣領家旧領と佐原一族との関係が窺える文字資料は【史料4】以外に見出せない。しかし他の御家人での板碑造立事例を瞥見するなら、例えば比企氏の乱で滅亡した比企一族の末裔である比企助員（沙弥明円）が、正中三年（1326）に比企郡内の現青鳥城跡付近（埼玉県東松山市）に板碑を造立したことが推定されている（「青鳥城跡板碑」『東松山市史資料第二巻』）。助員は早歌作者として著名な文化人であり、北条一門の甘縄北条氏にも接近している［外村1973・1981、永井2022］。こうした関係も奏功してか、かつての一族の本拠地であった比企郡内に何らかの権益を有し、板碑造立へと結びついた可能性が考えられる。また、武蔵国入西郡小代郷を本拠とする小代氏も、重俊の代にかつて宝治合戦の軍功で獲得した肥後国野原荘へ建治元年（1275）に拠点を移している。しかしその後も、弘安四年（1282）に重俊の菩提を弔うため、小代一族が結縁して小代氏居館跡の現青蓮寺（埼玉県東松山市）に板碑を造立している（「青蓮寺阿弥陀一尊板碑」『坂戸市史中世資料編Ⅰ』）。西遷によって相対的にかつての本貫地の役割は低下するものの、小代氏は一族の紐帯を確認するため、小代郷での結集を必要としたのだろう。

以上を勘案するに、【史料4】の板碑造立から、宝治合戦後に佐原一族の惣領となった光盛系佐原氏が、光盛の代よりかつての三浦惣領家の本拠地に進出し、矢部郷を実質的に知行していたことを推測させる。彼ら一族の活動は文化面でも見出せ、鎌倉後期の作例で慶派仏師の手による清雲寺所蔵の毘沙門天立像や、満願寺所蔵の不動明王立像・毘沙門天立像、また鎌倉末期制作とされる満昌寺所蔵の三浦義明坐像

などが矢部郷で造像されている。宝治合戦以前に比してその造像規模は縮小するものの、宝治合戦あたりから一族の曩祖に位置づけられた三浦義明が造像されたことは、新たに惣領となった光盛系佐原氏の関与が想像されよう。

ところで、佐原一族はすでに鎌倉前期から奥州地域との関わりが深く、鎌倉後期には時連系佐原氏など盛連の子息たちが陸奥国会津周辺で活動していたことが知られている［横須賀市 2012］。とりわけ光盛系佐原氏は、盛宗（光盛の孫）の妻が永仁三・四年（1295・1296）に会津猪苗代峰村岩城大明神へ神器を奉納し（「新宮雑葉記」「異本塔寺長帳」『新横補遺』2920・2921・2924・2925 号）、元弘元年（1333）では盛宗が会津綾金村観音堂を建立している（「新宮雑葉記」「異本塔寺長帳」『新横補遺』2940・2941 号）[7]。上記の史料は、いずれも近世地誌類に採録される金石文銘によるものだが、光盛系佐原氏のうち盛宗が、鎌倉後期から末期にかけて本拠地を陸奥国会津地域へ移し始めていること、つまり北遷しつつあったことを窺わせる点は重要であろう。

政治史のなかで光盛系佐原氏の動向を確認すると、先に板碑を造立した光盛の子息盛信は、文永九年（1272）二月の二月騒動で「佐原会津六郎左衛門尉、文永九年二ノ　北条時輔縁者自殺」とあるため（「系図纂要」『新横Ⅰ』1373 号）、北条時輔に与同して自害していた可能性が高い。また、光盛の子息泰盛から生じた盛宗ら一族は、安達一族と関わりが深い。『蒙古襲来絵詞』には安達泰盛邸の場面で盛宗に比定される「あしなのはんくわん（葦名判官）」が登場している。そして弘安八年（1285）の霜月騒動では、「三浦対馬前司」（頼連、佐原時連の子息）、「葦名四郎左衛門尉」（泰親、盛宗の兄弟）、「同六郎」（時守、盛宗の兄弟）、が泰盛とともに自害し（「安達泰盛乱自害者注文」「安達泰盛乱聞書」ほか（『新横Ⅰ』1397・1398 号））、他にも諸系図で同騒動にて盛次が死去している（「三浦系図」）。霜月騒動など、鎌倉後期の政変で光盛系佐原氏は大きな打撃を蒙ったことが知られよう。以後、都市鎌倉周辺で光盛系佐原氏の活動はほとんど見られなくなり、盛員の系統が陸奥国葦名氏となって南北朝内乱を生き延びていく。代わって時連系佐原氏のうち、得宗被官となった宗明の系譜に属する一族が台頭し、幕府儀礼のなかで重要な位置を占めるようになっていく。

さて、佐原一族の氏寺満願寺からは、創建期と目される尾張産瓦よりも、時期が下る年代の鎌倉前期頃の瓦群（本報告書では満願寺Ⅱ期瓦と仮称）が出土し、創建期よりも増加傾向を示している。これら瓦群には前述したように俊芿招請の時期とリンクし得るが、もう一つの可能性として宝治合戦後の佐原一族の造寺活動も示し得る。この時期の満願寺を外護した一族は、佐原義連の跡職など佐原惣領家を継承した光盛系佐原氏を想定することができる。幕府内の序列でも諸大夫クラスへと上昇し、本拠地で一定の造像も行っていることから、三浦一族の新たな嫡流となった光盛系佐原氏が本拠地矢部郷で社寺興隆を図った様子も想像される。また、満願寺遺跡出土中世瓦群は先の仮称満願寺Ⅱ期瓦以降の瓦群は見出されていない。それは、すでに鎌倉末期段階の金沢北条氏の六浦称名寺では本瓦葺建物ではなく檜皮葺や甍棟風建物へと移行した様子が窺えるため（元亨三年（1323）「称名寺絵図」［原 2006］）、満願寺でも同様の可能性が考えられよう。また、もう一つの可能性として、そもそも外護者である光盛系佐原氏が霜月騒動の影響などで勢力を後退させ、鎌倉後期から北遷先の会津地域を本拠地として重視し始めた結果も想定できる。いずれにせよ、宝治合戦後の時期も含む満願寺出土中世瓦群の存在は、宝治合戦後に三浦一族が単なる没落勢力となった訳では決してなく、惣領を継承した光盛系佐原氏を中心に幕府内序列で一定の高い地位におり、かつ本拠地でも社寺興隆を図った姿を雄弁に語り得る。

おわりに

以上、三浦氏庶流佐原氏の動向に着目しながら、満願寺への関与および出土中世瓦群を含む様々な地域資料を踏まえ、同氏による造寺活動の実態を本拠形成と連動させつつ縷々検討を加えてきた。再度、

氏寺満願寺および本拠地矢部郷と佐原一族との関係を中心に、明らかになった点を要約する。

［創建期から宝治合戦以前までの満願寺と佐原一族］

満願寺の創建および以後の伽藍形成は、「満願寺総縁記」にあるような佐原義連期頃に創建された小堂をベースとしつつも、谷戸内の開発の進展（本拠地支配の深化）とともに、義連あるいは長子景連による慶派仏師の造仏活動や、執権北条氏との関係を強化した家連の俊芿招請による寺容整備および伽藍形成へと段階的に行われたものと考えられる。満願寺出土中世瓦群の特徴として見られる、同寺創建期頃のものと目される尾張国八事裏山窯産を含む尾張産の可能性の高い瓦群（仮称「満願寺Ⅰ期瓦」）については、1200年前後の慶派仏師の手による満願寺での造像が行われた時期に、堂舎の整備が進んだ際のものと推定した（ゆえに本稿は、満願寺が小堂段階の創建当初から瓦葺とする立場はとらない）。

また佐原義連・景連の文化活動において、満願寺の造像では、東大寺供養による彼らの上洛が慶派仏師と接触する機会であったこと、また本拠における慶派仏師起用の要因として、義連が源頼朝の近習として仕えた影響を指摘した。満願寺で体現される佐原氏の文化レベルは、彼らの在京による京都社会との交流、および頼朝個人との密接な繋がりを反映させたものであった。

満願寺と佐原氏の歴史のなかで大きな画期と思われるのは、家連による元仁元年（1224）の泉涌寺僧俊芿の招請である。執権北条氏へ接近した家連は、とくに京都で六波羅探題を勤める北条時房との姻戚関係を築いている。時房は九条道家と政治交渉を重ねた経験を持ち道家子息の三寅（頼経）下向に尽力した。俊芿は道家妻の三寅出産時に戒師を担うなど、九条家と深い交流を持つ。かかる人的関係の結果、本拠地矢部郷へ俊芿が招かれ、仏堂が建立されているのである。満願寺の遺構から堂舎の建替えや規模拡張が窺え、この時期に満願寺の伽藍整備が大きく進展したものと思われる。創建期と目される尾張産瓦よりも、時期が下る年代の鎌倉前期頃の瓦群（仮称「満願寺Ⅱ期瓦」）は、この時期に葺かれた可能性があろう。

［宝治合戦後の満願寺と佐原一族］

宝治合戦後、滅亡した三浦氏本宗家に代わって佐原一族が台頭し、①「三浦介」を継承し国衙に関する権益に立脚する盛時系佐原氏、②義連以来の佐原惣領家を継承する光盛系佐原氏、③かつての三浦光村と同様に在京活動を展開し、得宗被官となっていく時連系佐原氏、の三系統が主に活躍する。①は「鎌倉中」と記される在鎌倉勢力として存続し（あるいは大磯など旧三浦一族の国衙権益の地が基盤か）、②は義連跡を知行し満願寺や旧三浦本宗家の本拠地も含む矢部郷を基盤としつつ、鎌倉後期以降に陸奥国会津地域へ北遷し、③は在京・在鎌倉しながら得宗被官として政治的地位を上昇させ、鎌倉後期には古久里浜湾周辺にも拠点を有する、といった変遷を辿っていく。

宝治合戦後の満願寺の外護者および矢部郷の権益は、光連系佐原氏が継いでおり、幕府内の序列でも諸大夫クラスへと上昇を果たしている。また満願寺には鎌倉後期作例の仏像も遺されており、少ない事例ながら造像活動が窺える。先の仮称「満願寺Ⅱ期瓦」はこの時期にも葺かれた可能性が残り、かつ仮称「満願寺Ⅰ期瓦」に比して増加傾向を示す。宝治合戦後の満願寺における堂舎建立は、義連跡職など佐原惣領家を継承した光盛系佐原氏の光盛らが行ったことが想定される。ただし、同一族は、霜月騒動以後から次第に陸奥国会津地域へ本拠地を移し始め、鎌倉・本拠地矢部郷での活動徴証は認められなくなっていく。仮称「満願寺Ⅱ期瓦」は、それ以後の時期に相当する瓦が見出されておらず、満願寺での造寺活動は先の光盛期頃までで、以後はほとんど実施されなかったことになろう。その理由はそもそも本瓦葺建物が採用されなかった可能性も考えられるが、あるいは光連系佐原氏のかかる北遷の動向ともリンクするかもしれない。

本稿では三浦氏庶流佐原氏を事例に、その本拠地での活動の展開を文献史料と中世瓦を含む様々な地

域資料と合わせて復元を試みてきた。満願寺自体の評価において考古学側の見解との間で齟齬を来す部分もあろうが、出土中世瓦群の定性的・定量的観察の結果を参考としつつ、佐原一族に関する興味深い文化的側面を明らかにすることができたと考える。

勿論、今後の考古学研究の進展により、満願寺遺跡出土中世瓦の編年やその評価に変更が生じた結果、本稿の見解も修正を求められる部分もあろう。とくに、ある瓦群の編年観を数年・数十年単位で変動する鎌倉御家人の動向に連動させるには、なお一層の成熟が求められることは言を俟たない。しかしそれでも、これまで鎌倉御家人研究のなかでハードウェアとしての寺院と御家人たちの関係はあまり重視されず、彼らの造寺活動の実態については未詳な部分が多かった。そうしたなかで、中世瓦を他の地域資料とともに御家人本拠での造寺活動を検証する際に積極的に用いたことは重要な試みであると考える。従来中世瓦が、御家人本拠の性格を語る際に用いられることが稀であった点に鑑みるならば、本拠から出土する瓦の存在は、御家人が建立した寺院の性格、ひいては御家人の地域権力としての性格を知る上で極めて重要な地域資料となろう。また上述した仮称「満願寺Ⅱ期瓦」で見られるような宝治合戦前後での瓦群の存在より、これらの瓦群は同寺を外護した佐原一族の権力伸長を示すバロメーターになり得るのかもしれない。

瓦編年の差異や瓦生産と消費地との関係など、鎌倉期東国における瓦生産・流通を巡る課題は山積しているものの、ひとまず、文献史学側からのリアクションとして本稿が、鎌倉御家人本拠の性格や権力の変遷を明らかにする上で、瓦資料が有力な地域資料となりうることを示すケーススタディとなれるならば、それに勝る喜びはない。大方のご叱正を仰ぎたい。

【註】

（1）『新横須賀市史　資料編　古代・中世編Ⅰ』『新横須賀市史　資料編　古代・中世編Ⅱ』『新横須賀市史資料編　古代・中世補遺』から引用する際は「『新横Ⅰ』○号」（○は各巻の資料番号）などと表記する。

（2）『吾妻鏡』文治五年（1189）四月十八日条に、北条時房の加冠役に佐原義連が就き、当初時房が名を「時連」と名乗っていたことを踏まえるに（後に将軍頼家に命ぜられて建仁二年（1202）に「時房」に改名する）、北条時房と佐原一族との関わりはかなり早い時期から築かれていたと考えられる。

（3）満願寺については、三浦郡佐原郷内とする記述が書籍等で散見されるが、佐原の地が郷名として登場するのは、例えば文禄三年（1594）の「相州三浦佐原之郷御水帳」など近世検地帳であるため、大きく時期が下る。鎌倉期においては、嘉禎三年（1237）に佐原盛連の後家が「矢部禅尼〈法名禅阿〉」（三浦義村娘）と称され、「矢部別庄」に居住していた（『吾妻鏡』同年六月一日条）。夫方で過ごす当時の婚姻居住形態を踏まえるに、北条泰時と離縁した矢部禅尼は、夫盛連方の邸宅に住み、盛連没後はその菩提を弔いながら三浦郡矢部郷内の別荘に居住していたと考えられ［高橋 2016a］、鎌倉期の満願寺および佐原一族の本拠地は矢部郷内にあった。

最近、瀬谷貴之「総論　運慶―鎌倉幕府と三浦一族―」（横須賀美術館・神奈川県立金沢文庫特別展『運慶―鎌倉幕府と三浦一族―』吉川弘文館、2022 年）にて、これまで満昌寺の創建とされてきた、故三浦義明供養のため源頼朝が「三浦矢部郷内可建立一堂之由思食立」（『吾妻鏡』建久五年（1194）九月二十九日条）という記事を、岩戸満願寺の創建記事とする意見が出された。これは縁起や地誌などの近世由緒をすべて偽作として排除した上でのものだが、満願寺が矢部郷内にあるとなれば全く可能性がないわけではない。同記事を満願寺創建とする論拠は「果たして建久五年までその供養が、三浦氏によって行われなかったとは考え難い」とし、治承四年（1180）の衣笠城合戦で戦死した三浦義明の没年から時期が立ちすぎていることに求める。ただし、三浦義澄らの一族の家祖認識は、治承・寿永の内乱期や和田合戦で平安末期に活躍した三浦為継を曩祖としている（延慶本『平家物語』、『吾妻鏡』建保元年（1212）五月二日条）。三浦義明を家祖とする三浦惣領家の認識は宝治合戦から登場しはじめ（『吾妻鏡』宝治元年（1247）六月八日条）、鎌倉後期頃に形成されたものである［高橋 2016b］。鎌

倉初期から三浦義明が曩祖として三浦一族のなかで共有された存在ではなく、ましてや庶流の佐原氏が頼朝発願で満願寺を建立して義明を供養するとは考えがたい。また、義明の供養時期の特徴については、建久五年の義明供養と近い時期の同八年に石橋山合戦で落命した佐那田義忠の供養のため、頼朝は鎌倉山内に証菩提寺を建立している（『同』建長二年（1250）四月十八日条）。佐那田義忠の供養も没年から時期が経過して行われていることになる。これについて先行研究では、当該期が奥州合戦を経て頼朝の軍事権力が清算・再編される時期にあたり、頼朝挙兵時期の敗戦が三浦義明や佐那田義忠の忠義のエピソードとして頼朝自身によって「創造神話」化されていたことが指摘されている［高橋 2016b・田辺 2009］。彼らの供養・顕彰が極めて政治的な意図のもとなされていたことに鑑みるに、義明供養の時期は鎌倉幕府権力との連動を想定すべきであろう。何よりも大矢部にある満昌寺には、鎌倉後期・末期頃制作の三浦義明坐像が安置され、宝治合戦後に嫡流となった佐原氏の関与が指摘される［横須賀市 2009］。像内修理銘や地誌類から近世段階には確実に同寺にあるため、明治期の廃仏毀釈での移動は認められない。かかる造像がされる時点で、同寺が義明ゆかりの寺院とする共通認識が三浦一族にあり、その認識があるが故に、鎌倉後期に嫡流となった佐原氏の義明坐像の制作があったと理解される。三浦一族の曩祖が鎌倉初期では為通であるのに対し、『吾妻鏡』中に三浦義明顕彰記事が散見する理由としては、幕府の顕彰事業に加え、そもそも編纂物である同歴史書での頼朝挙兵記事が、頼朝の軍事行動に多大な貢献を果たした北条氏・三浦氏・佐々木氏・結城氏らの家の起源譚が含みこまれた各家の由緒を語る集合体であることが影響しよう［藪本 2022］。宝治合戦前後から鎌倉後期・末期にかけて、三浦一族の曩祖が義明と認識されたがため、彼ら一族の―とくに佐原氏であろうが―由緒を語る記事がふんだんに盛り込まれるようになったと考えられる。満昌寺が頼朝発願による義明供養の寺院であったため、『吾妻鏡』にはその供養を示す記事が取り入れられ、また同じく義明を曩祖と認識する佐原一族が鎌倉後期・末期頃に満昌寺で三浦義明坐像を造像したのであろう。先の建久五年の記事が三浦惣領家の寺院である満昌寺である蓋然性は崩れない。蛇足ながら、先の意見ではその他の論拠として考古学的見解［横須賀市教育委員会 1992］を引用しつつ、満願寺が創建当初から臨池伽藍であったことを述べ、鎌倉永福寺との近似性を強調しているが、これもそもそも当該地で苑池遺構は検出されず、満願寺の伽藍配置形成を本稿で俊芿招請時期としたことからも成り立ちがたい。以上の諸点から、満願寺の創建を『吾妻鏡』建久五年九月二十九日条の記事内容に結びつけることはできない。

（4）黒駒地内「駒ノ墓」の永福寺式軒瓦に関しては、八田氏の同族小田氏や下妻氏・小山氏・結城氏などさまざまな武士勢力の関与が想定され確定には至っていない。今後の鎌倉前期における当該地の地域情勢を踏まえ、再度出土瓦を定位する必要があろう。同所の瓦については佐久間秀樹「駒之墓表採の軒平瓦について」（『下妻の文化』23 号、1998 年）、『八田知家と名門常陸小田氏―鎌倉殿御家人に始まる武家の歴史―』（土浦市博物館、2022 年）に詳しい。

（5）佐原一族以外にも、例えば『吾妻鏡』建長二年（1250）三月一日条の京都閑院内裏造営の費用負担として課され御家人のなかに佐原盛連跡・大多和義成跡・長江明義跡があり、三浦一族では、佐原・大多和・長江の一族は宝治合戦後も御家人として存続していた。

（6）その他に、（文保元年（1317））正月三十日「金沢貞顕書状」（『鎌倉遺文』26194 号）では金沢貞顕が、「三浦安芸前司（時明カ）」に金堂の柱三本を申しつけており、佐原時明一族と北条一門との関わりの深さが窺える。

（7）『新編会津風土記』（『新横補遺』2931 号）には、応長年間（1311~1312）に佐原盛宗家臣の三河権守宗景が会津梁取村で館を建てたという記事を載せる。近世地誌の記載だが、これも会津地域の本拠地化を窺わせる記述であろう。

【参考文献】

秋山哲雄「都市鎌倉における北条氏の邸宅と寺院」（同『北条氏権力と都市鎌倉』吉川弘文館、2006 年）
石井進『鎌倉武士の実像』（平凡社、1987 年）

石川安司「瓦・仏像・浄土庭園遺構－埼玉県内の鎌倉時代前半を中心に－」（埼玉県立嵐山史跡の博物館編『東国武士と中世寺院』高志書院、2008 年）
岩田慎平「北条時房論―承久の乱以前を中心に―」（『古代文化』68、2016 年）
上横手雅敬『北条泰時』（吉川弘文館、1958 年）
海老名尚・福田豊彦「『田中穣氏旧蔵典籍古文書』「六条八幡宮造営注文」について」（『国立歴史民俗博物館研究報告』45 集、1995 年）
鎌倉市『鎌倉市二階堂国指定史跡　永福寺跡　国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査報告書―遺物編・考察編―』（鎌倉市教育委員会、2002 年）
小林康幸「永福寺式軒瓦と鎌倉御家人」（神奈川県立歴史博物館特別展示図録『永福寺と鎌倉御家人―荘厳される鎌倉幕府とそのひろがり―』小さ子社、2022 年）
齋藤慎一『中世武士の城』（吉川弘文館、2006 年）
鈴木かほる「鎌倉後期の三浦佐原氏の動向」（『三浦一族研究』4 号、2000 年）
鈴木かほる『相模三浦一族とその周辺史』（新人物往来社、2007 年）
高橋秀樹「佐原義連とその一族」（同『三浦一族の研究』吉川弘文館、2016a 年）
高橋秀樹「「三浦介」の成立と伝説化」（同『三浦一族の研究』吉川弘文館、2016b 年）
高橋秀樹『対決の東国史２　北条氏と三浦氏』（吉川弘文館、2021 年）
田辺旬「鎌倉幕府の戦死者顕彰」（『歴史評論』714、2009 年）
外村久江『早歌の研究』（至文堂、1973 年）
外村久江「早歌「撰要両曲巻」の成立と比企助員」（『日本歌謡研究』20 号、1981 年）
永井晋『比企氏の乱』（まつやま書房、2022 年）
中三川昇「三浦半島東岸の古代末～中世初期遺跡群について―三浦氏本貫地とその周辺地域における遺跡群の様相―」（『考古論叢神奈川』21 集、2015 年）
西谷功「泉涌寺開山への諸相」（同『南宋・鎌倉仏教文化史論』勉誠出版、2018 年）
原廣志「永福寺所用瓦について」（平成十五年度～平成十七年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書『吾妻鏡と中世都市鎌倉の多角的研究』（研究代表者：五味文彦）、2006 年）
菱沼一憲「源頼朝「御権威」の成立と新秩序」（同『中世地域社会と将軍権力』汲古書院、2011 年）
桃崎祐輔「常陸三村山採集の永福寺系瓦と「極楽寺」銘梵鐘」（『歴史人類』31 号、2003 年）
藪本勝治『『吾妻鏡』の合戦叙述と〈歴史〉構築』（和泉書院、2022 年）
山野龍太郎「小代行平に関する覚書」（『日本史学集録』40 号、2019 年）
湯山学『相模武士二　三浦党』（戎光祥出版、2011 年）
横須賀市教育委員会『岩戸満願寺―満願寺境内遺構確認調査報告―』（横須賀市教育委員会、1992 年）
横須賀市『新横須賀市史　別編　文化遺産』（横須賀市、2009 年）
横須賀市『新横須賀市史　通史編　自然・原始・古代・中世』（横須賀市、2012 年）
渡邊晴美「北条時房について―生誕から連署就任まで―」（同『鎌倉幕府北条氏一門の研究』汲古書院、2015 年）
渡邊浩貴「権力を“荘厳”する―永福寺と鎌倉幕府・鎌倉御家人―」（神奈川県立歴史博物館特別展示図録『永福寺と鎌倉御家人―荘厳される鎌倉幕府とそのひろがり―』小さ子社、2022a 年）
渡邊浩貴「鎌倉御家人の造寺活動と地域基盤」（中世瓦研究会『シンポジウム「永福寺式軒瓦の成立と展開」発表要旨、2022b 年）
渡邊浩貴「東国武士の地域連携と鎌倉幕府の成立―源義朝の政治的・文化的遺産をめぐって―」（『令和 4 年度公開講座　時代の変換点に生きた相模の人々の暮らし―古代から中世へ―』公益財団法人かながわ考古学財団、2022c 年）